

特集 ダリットと部落をつなぐもの とりくみは続く

ダリットと部落の運動は古くから接点をもってきた。特に、2000年以降は「職業と世系に基づく差別の撤廃」と「反人種差別世界会議」(南アフリカ、ダーバン)という国連の取り組みを通じたダリットと部落の係がさらに強化された。今号では、インドとネパールで行なわれた両者をつなぐ最近の取り組みを紹介するとともに、インドにおけるダリット女性たちの集会を紹介する。ダリットと部落を中心にした差別撤廃の国際連帯をさらに発展させる可能性を探ってみたい。

ダリットのとりくみに学び、連帯の絆をむすぶ旅

10月7日から12日まで、IMADR-JCはダリットの闘いから学ぶ目的でスタディツアーを行なった。訪問を受け入れてくれたのはIMADRのパートナー団体である農村開発教育協会(SRED、インド、タミールナドゥ州)であった。ツアーには、IMADR-JCの2010年の重点取り組みの一つである「マイノリティコミュニティの青年が国際連帯について現場で学ぶことを支援する」に沿って、部落解放運動に関わる青年2人も参加した。彼らを含む5人からなるグループで実施したスタディツアーについて各参加者の報告を中心に紹介をする。(編集部)

さらに知りあい 理解しあうことを求めて

小森 恵(IMADR-JC)

今も続く隔離と排除

SREDは農村におけるダリットの問題に取り組んでいる。私たちが訪ねたダリット居住区はどこも周囲から切り離された場所に立地していて、水、電気、道路などの事情は悪い。ある地区では粘り強い行政交渉の結果、道路を勝ち取った。その地区から留保制度(是正措置)のもと村議会に議員を一人送っている。彼は現在議長を務めているが、他カーストの議員の嫌がらせや妨害で議長職を果たせず困っていた。

日本における特別措置事業の前後の違いを示す写真を見せた。山懐に包まれ他から切り離された部落地区の写真、そこにつながる橋が割り箸のようなものから鉄骨に変わった写真、環境改善前と後の都市部落の家並み。日本に行ったことのないSREDのメンバーたちは差別の結果として表れてくるものを映像で見ることで、部落差別を身近に理解してくれたようだ。

カースト制度はヒンドゥー教にまつわる身分制度である。人口約6200万人のタミールナドゥ州をカースト分布でみれば、一部ブラーミン(僧侶階層でカースト制度では最高位におかれている)と、他はほとんどがシュードラ(人の嫌がる仕事を押しつけられてきた最下層)と第5のカーストといわれるダリットである(州人口の20%を占めており、全30州のうち人口比では5番目に高い)。中間に位置するクシャトリヤ(武将などの階層)とヴァイシャ(商工業などの生産にかかわる階層)の人口比は低い。生活現場で起きているダリットへの差別はシュードラが関与するものが多いようだ。

SREDとの話しの中で、「カーストをなくす結婚を奨励」という言葉が出てきて、思わず聞きなおした。カーストにこだわらずに外に出て行き、他の人びとと交わることによりカーストをなくしていく、というものだ。しかし現実には厳しい。ダリットと他のカーストとの結婚が殺人も含む悲劇を今も生み出して

スタディツアーの日程

10月7日 成田・関空発 バンコク経由で
チェンナイ空港に深夜到着
8日午前 チェンナイ市内 タミールナ
ドゥ・ダリット女性運動(TNDWM)の
事務所にてオリエンテーション
午後 チェンナイ市内のスラム訪問後、宿
泊地のカンチプーラムへ移動
9日午前 SREDのオフィスにてスタッフ
および運動体とミーティング
午後 ムトゥール村とランガヴァラム村を
訪問
夜 ファティマさんの村のお祭りに参加
10日午前 カンチプーラムのヒンドゥー
寺院および遺跡を見学
午後 ルマンガラム村を訪問
夕方 アンベドカル学習コース修了式に参
加
11日午前 故田中敦子さんの写真を飾る
セレモニーと部落青年に関する調査
報告
午後 チェンナイに移動
夜 深夜便にてバンコク経由で帰国

いる。州の開発政策のもとタミールナドゥ州には経済特区がいくつも作られ、多数の多国籍企業が操業をしている。そうした工場で若者たちが出会い、結婚に至ることもよくある。そこで初めてそれぞれの出身カーストが分かったりする。そうした意味からも人口の動態は多様になっており、カーストによる厚い壁への人びとの挑戦は意識するしないにかかわらず、今後ますます増えると思われる。

貧困問題の解決

インド政府が国連で公約したミレニウム開発目標における貧困撲滅指数を達成するため、タミールナドゥ州政府はいくつかの貧困対策をしている。その典型が各戸へのテレビと調理コンロの無料配布だ。しかし、ダリットの多くは電気やガスの普及が遅れている農村に住んでいる。テレビもコンロも役には立たない。「ばら撒きだ」と人びとは批判をする。失業者への雇用対策として公共事業も行なっている。道路建設や森林整備などの職を年間1人100日保障するというのだが、ダリットの人たちには、なかなか雇用が回ってこない。回ってきても、その中で一番きつくて人の嫌がる仕事を押しつけられ、おまけに賃金をピンはねされる。農地を工場用地に転売する地主が増えているために、それまで就いてきた賃労働の農作業の口もぐんと減った。さらには、今年は雨が降らないために作物が育たない。私たちが訪問した村の人たちは、こうしたことを背景に生活苦に喘いでいた。

未来への希望

厳しい現実の中、うれしい取り組みもある。SREDでは高校生を中心にアンベドカル学習コースを3年前から実施している。若い人たちにアンベドカル博士の思想と実践を学んでもらい、次世代を託すことが目的だ。協力しているのはタミールナドゥ州のマドレイ・カマラジュ大学である。受講生は通信教育と月1回のスクーリングからなる1年間のコース

地域の拠点としてのディケアセンター

SREDはダリット子どもディケアセンターを7か所で運営している。立ち上がりから運営まで、資金面を中心にIMADRは協力をしてきた。それができたのは、連合「愛のカンパ」、大阪同和・人権企業連絡会、浄土宗国際協力プロジェクトなど、日本で支えてくれた諸団体があったからだ。農村地帯のダリットの居住区はインフラも十分整備されていない。そのような中、地区で共有できる建物は大きな財産であり、希望と未来に向かうシンボルである。どのディケアセンターも机・椅子、本棚



などはほとんどなく質素である。その建物が、幼児のディケアセンターのみならず、小学生たちが夕方補習クラスに通い、大人たちが会合や社交に利用できる場としてフル回転で使われている。公共サービスがほぼ届かない周縁に追いやられたコミュニティの人びとにとって、こうした拠点をもつことは大きな意味がある。未来につながるこうした場を絶やしてはいけない。

を受け、課題のペーパーを提出する。ダリットだけではなく、他カーストやモスレムの青年たちも受けている。毎年百数十人が受講しており、ほぼ全員が及第点をとって1年後には巣立っていく。修了が認定されれば大学進学や就職時に役立つということだ。SREDが負担をしているため授業料などは無料である。しかし、今年は財政的に厳しかったため、SREDの依頼を受け、IMADRは修了認定にかかる費用の一部を支援した。実際は、IMADR ジュネーブ・オフィスの故田中フォックス敦子さんのご家族からの寄付を活用させていただいた。

そのため、私たちの滞在中に2010年卒業の修了式が行なわれた。ツアー参加者を代表して部落の青年2人がステージに上がった。お祝いのスピーチをするとともに、修了生一人ひとりに渡された修了証書の授与を手伝った。証書を受けとる修了生100人の顔はどれも達成感に満ちていた。部落とダリットの若者が出会う輝く瞬間であった。

(こもりめぐみ)

女性の自立と手作りショップ

SREDには実にさまざまな人びとが入り込んでいる。女性のグループだけ見ても、マタマのグループ、セックスワーカーのグループ、イルラ(先住民族)のグループ、工場労働者のグループなどが拠点として活動をしている。ダリット女性のレイプ事件、警官に賄賂を強要されたセックスワーカー、ダウリ制度で婚家から暴力を受けたダリット女性のケース・・・ SREDに集まってくる女性たちは相談サービスだけではなく、意識化と教育、そして自立のためのスキルトレーニングなどのプログラ



ムもうけることができる。スキルトレーニングには、ミシン縫製(衣類や小物)、刺繍、紙コップ作りなどがある。トレーニングで得たスキルは女性たちが仕事を探す上で役に立つ。SREDで備えているミシンや紙コップの機械を使って腕をあげた研修生たちが作った製品は立派な売り物となる。そうした製品を売る手作りショップがSREDの一面に設けられた。